氏名 匿名希望

ぼくは、4年前に石井沢小学校でしんどうの大きな地しんを体けんしました。それは、2年生のときに、かえりの会をしていたときでした。

「先生のお話し集会をおわります。」

とこたえたとき、いきなりすごくおきな地しんがきました。先生が

「机の下にかくれて」

と言ったのでかくれました。じしんはけっこうながくて、地しんがおさまっていくときに、ぼくの机のよこになにかがおちてきました。ぼくはそのよこのおちたものを見たくて頭をだしてみたらしゃしんたてやぶれました。しばらくたつと、校庭に出て親のむかえでまちました。

その後ってそこのあかったけれど、次の日にげんばつで事故があったから気をつけてくださいといろのかたしとてやってすくいにいりました。もうにどとこのような体けんはしたくないです。今は、せまい、仮設にいるので早くみやこじにかえりたいです。

（20文字 × 20行）

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名　匿名希望

三月十一日、あの瞬間がとってもんわっ
てに。

その頃、私は、まだ二年生だった。下校の
時間にとってもなく大きな地しんがあった。
地しんは一じんでなくとても長く続き、
おそろしかった。それよりもおそろしいこと
が起きた。原子力発電所から放射線が大量に
でてきた。にあ、ふるさとを出れることが
、た。みんな別々にくらすんっていった。
けれども、一カ月後に学校に行けるよう
になった。けれども、転校してしまった人もい
た。でも、この地しんは、東北エリアがリじ
かな人見ることがあった。それは、ちがう学
校の人といっしょに勉強もできるようになった
ことだ。人数も増えて、毎日が楽しかった。
支援物資もたくさんの人がくられてき、
学校で勉強ができるようになった。
また、みんながんばきになってもどってきた
ことは、少しあっ悲しくはれられない
と思う。

（20文字 × 20行）

453　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 横田 優弥

あの時のことを思い出すと、こわかったとしか言いようがありません。

ぼくはあの時小学二年生で、卒業式まであと少しという時でした。帰りの会が終わり、バスの時間をまっている時、体育館で遊んでいると、小さなゆれが起き、すぐに大きなゆれが起きました。みんなで校庭にいなんし、帰れるのをずっとまっていましたが、その間も大きなゆれが続いていました。周りの人が校庭のはしを見ているのでぼくも見ると、登り棒が土しゃくずれによって折れていました。その時初めて、地しんのこわさを知りました。

今はもう学校にもどれていますが、お母さんの実家にすんでいます。所々にはひびわれなども見られます。

大人達が今はがんばってこの問題に取りくんでいますが、自分が大人になったら、自分もこの問題のかい決に協力できたら良いと思います。

（20文字 × 20行）

454　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 門馬花音

私は、三月十一日の地しんがおこる直前まで友達と遊んでいました。いきなり大きくゆれたのでびっくりしました。そのときはいそいで外に出ました。私のまわりには、こわくて泣いている人がいました。私も家にいるじいちゃんやばあちゃんのことや仕事にいってるパパのことなどが心配で泣きそうになりました。そのあと、バスの中でまっていました。少ししたらいえの人がむかえにきました。

家にかえって夜になるとみんなでこたつにねました。とても不安でした。

次の日の夜にひなんしてください と放送されました。私はナップサックにその時一番大切にしていたものをつめてひなんしました。

私達は船引にひなんしました。家をかりてそこに3年かん住みました。新しい友達が出来て毎日のようにあそびました。でもやっぱり都路のほうがいいと思いました。

私は3年間の生活でより都路を好きになりこれからは私も復興の力になりたいです。

（20文字 × 20行）

氏名 匿名希望

ぼくは、3月11日2時46分に学校の体育館にいました。最初は何が起きているかわからずに先生に言われるままに外に行きました。外にはもうれがあさまってもないている人もいました。周りを見てみると、小さい土砂くずれが起き、上り棒がこわれていました。その後は、がくゆで親を待っていました。親が来たら家に帰ってニュースを見ました。そこで、どんなことが起きているか知りました。翌日には、原発が爆発して半径10km以内が立ち入り禁止ということも知りました。ぼくは、そのニュースを見てちょっとするとまた半径20kmを立ち入り禁止というニュースも見ました。ぼくはそのニュースを見て、不安になりました。その後は、休みになって新がたにでなんしました。学校が船引に一たん移動したので、仮設にすっこしました。3年たって今は都路にもどれたので良かったです。

（20文字 × 20行）

田村市立古道小学校　12 歳

456　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 武田 [illegible]

ぼくは、自然が大好きです。三月十一日までは、都路の家の山で楽しく体を動かしてあそんでいました。

しかし三月十一日からぼくが大好な自然とふれ合うきかいを失いました。いつもは、外であそんでいたのが、地震のふるいアパートにすんでいるためにあまり体を動かさないで冬休みもずっと家の中でゲームやマンガを読みながらぐうたらすごしていました。ぼくの家族もみんな早く都路にもどりたいといっています。ぼくも早く都路にもどりたいです。もどったら家族みんなで楽しくくらしたいです。ぼくは、また都路にもどったらたくさん体を動かしたいです。今年から中学生です。中学生になったら野球部に入ります。都路は広いので体力づくりのために走ったりして都路で思いっきり体を動かしたいです。家族みんなで幸せにくらしたいです。

（20文字 × 20行）

田村市立古道小学校　12 歳

457 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名　松崎雅人

ぼくは、3月11日の東日本大震災を体験しました。それは、とても大きな地震で、地めんにひびが入るほどでした。

最初は、家は、大じょうぶかなとか、家の人はだいじょうぶかなと考えていました。

それから、ぼくたちは、船引のはい校になった、石森小学校を借りて、岩井沢の人たちといっしょに勉強をしました。

最初は、岩井沢の人たちといっしょに仲良くなれるか心配でした。でも、すぐ友達になれたのでよかったです。東日本大震災が起きてから、ぼくたちに、いろんな人から支援ぶっしが届けられました。えんぴつやけしごむなどがよく届けられていました。ぼくたちのために、そのような支援ぶっしを送って頂いたことを感謝しています。

そのあと、古道小学校へやっともどってきました。なつかしいかんじがすごくしました。

これからは、まだ入れない地域のところも入れるようになるといいと思います。

（20文字 × 20行）

田村市立古道小学校　12歳

458　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 加藤美穂

私はあの時2年生で、もうすぐ3年生という時に地震がきました。急にきたのでびっくりしました。とてもゆれが強く長かったのでこわくて泣いてしまいました。でも6年生が「だいじょうぶだよ。こわくないよ。」と言ってくれたり友達がいっしょだったのでちょっとだけ安心しました。そしたら、お父さんが来ました。お父さんが来たので、もっと安心しました。その後、すぐに私の親せきの家に帰りました。そしてまっていたら、お母さんが来ました。その後、お父さんが来て帰りました。帰った後にテレビを見たら、地震でがけがくずれたり、第一原発がばく発したりというテレビばかりでした。私はどうなるのかという思いで心配でした。しかし今は都路で学校も再開して、都路の家にも住めるようになったので、とてもうれしいです。しかし、復興は全ぜん進んでいません。なのに福島でオリンピックをやるということは反対です。はやく復興が進んでほしいと思います。

（20文字 × 20行）

田村市立古道小学校　12 歳

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 内田 梨奈

小学二年生

私は、しん災があった時まだ、小学二年生で、下校していました。その時は3人の友達といっしょに帰っていました。最初の小さな揺れの時は気にしていませんでしたが、だんだんと大きくなって近くの家からさけび声やかべが落ちてきた時はとてもこわくなり、友達と学校にもどりました。泣いている子もいて上級生がなぐさめてくれていたのをいまでも覚えています。

家に帰ると、家族と会えてとても安心しました。それでも夜になっておじいちゃんが家を出ていなくなるとなった時は不安でした。でなんしてからも、いつもどおるのかと二つも考えていました。そんな時、全国から送られてくる支援物資や応援のメッセージには世界中からのメッセージには、やはりしんぜんしました。また日本からだけではなくいっぱいもらいました。

私は、しん災を経験してたくさんのやさしさを受け取りました。なので今度は私がその人たちをかえやるようにがんばりたいです。

（20文字 × 20行）

田村市立古道小学校　11 歳

460　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 添田 侑里

私の東日本大震災の思い出は2つあります。

1つ目は地震がありみんなが泣いていたことです。私はみんなが泣いている中で地震がありのぼり棒がくずれていくことを見てしまいました。そしてバスにのり周りが次々にむかえに来てくれる人がいてその人を見ていたら、とてもいえにかえりたくなりました。

もう1つは、家のことです。やっとのことで家にかえると、家の家具がたくさんたおれていて、あそびに来ていた子もないていました。

復興をしてほしい所があります。そこは、こうさようのしせつです。そこを使っている人が増加するようにしてほしいので、そこだけはしっかりと早く復興をしてほしいと思いました。

2つ目はみんながたのしめる所をつくってほしいです。

（20文字 × 20行）

田村市立古道小学校　12歳

461　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 本田 あゆり

わたしは、3月11日の東日本大震災の体験をして、とてもこわい思いをしました。3月11日の大震災の前はふつうに家族といっしょにくらしていました。でも、ある日の夜私がおふろに入った後に「ピーポーピーポー」という音がして静かにきいていると「ひなんしてください」という声が聞こえて私は、すごくとまどっていました。どうすればいいのか分からないし、何を用意すればいいのかも分からなかったのですごくこんらんしました。私はどこに行くのか分からないままみんなといっしょについていきました。着いたところは、まだ第一かせつができていなかったころのグラウンドでした。そこに車をおいて私達は、船引中学校に行きました。ひなんしてきた人達が沢山いました。知っている人も何人かいました。この人達もこわい思いをしているんだなと思いました。

私達は、忘れられないこわい思いをしたけれど、このことを忘れずに強く生きたいです。

（20文字 × 20行）

氏名 匿名希望

私は地震が起きた時、小学2年生でした。くずれたがけを見ていたら自然に泣いてしまい、友達がはげましてくれました。

お母さんはすぐにむかえに来てくれました。その日の夜に、ひなんして郡山に行きました。おばあちゃんは母の妹の家に、私と母と父は車で一夜をすごしました。次の日、ろう学校に泊めてもらえることになりました。そこには同じような子供もいました。ご飯はおにぎりやカップラーメンで、おふろは4日に1度ほどしか入れませんでした。

学校が始まるというメールが来たのでひっしでアパートをさがし、見つかった時はみんなで喜びました。毎日入れるおふろは、とても気持ち良かったです。

都路からはなれる友達もいたけど、私は家族で都路にもどりたいと思います。

若い人たちが働く場所が少ないふる里に、会社などができればいいなと私は思います。

(20文字 × 20行)

田村市立古道小学校　11歳

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 柳沼 彩世

東日本大震災

あの東日本大震災

平成二十三年三月十一日、あの東日本大震災

災が起きた時、私は学校の外にあるすがらん

坂を下っていました。学校が終わり、楽しく

話をしながら友達と二人で二人の三人で私

と二人で教室に戻ると、ピアノの教室に入る

のでした。私と二人は、ピアノの教室に入る

中、大きなゆれがあり友達と二人は涙をうか

べていたので、大丈夫だよ。と、おかあさ

から。と言い、すぐすらん坂を降りました。

すると、先生方とみんなが二人で、少しだけ

しました。すぐ、みんなは涙を流しながら

「早く帰りたい。」お母さんに会いたい。と

言いながら、お父さんにあいました。

現在の古道小学校と比べると校舎も校

庭もすべて二になりましたが、他のものは

そのままの所が少しくずれていました。

ですが、古小のかたまっていたおれていない

本当にすか。だです。三年ぶりに古道小学校

に帰ってこられてすが、だです。

（20文字 × 20行）

郡山市立高野小学校　8歳

464 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 岩山奇心花

2011年3月11日、東日本大しんさいがありました。その時わたしは、ほいくしょに通っていて、おひるねをしていました。そしておひるねをしていたさいちゃうたったので、しんさいがおこった時は、すごくびっくりしました。それでみんなでふとんの中に入って、その時はすごくこわかったです。

そして今は東日本大しんさいから4年がたちました。東日本大しん災で多くの人がかぞくをなくしています。わたしのかぞくはみんな大じょうぶでした。家も大じょうぶでした。それにしんさいの時は、すごくたくさんほうしゃせんがあったけれど今はすくなくなりました。それで大しんさいのしんぱいもあまりしなくなりました。

未来の福島は、ほうしゃせんを、ぜんぶなくしてほしいです。ほうしゃせんをぜんぶなくせば外でたくさんあそべるし、ふくしまけんいがいのちいきもこまらないからです。じしんはニどとおきないでほしいです。

（20文字×20行）

郡山市立高野小学校　8歳

465 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 村田かな

2011年3月11日。わたしは、東日本大しんさいの時、ようち園から帰ってきたばかりでした。すごく大きくゆれてとてもこわい思いをしたのを今でもおぼえています。このころは、大すきな外あそびができないことや家のはたけでそだてたやさいも食べることができなくてがっかりしていました。

今は、ほうしゃせんもすくなくなって、外でもあそべるようになったのですごくうれしいです。それに育てたやさいもおいしいです。

今は、テレビでも新聞でも毎日のように、ほうしゃせんということばを聞きます。わたしのおかあさんが小さい時は、ほうしゃせんということばを聞いたことはないそうです。

じょせんがおわって、ほうしゃせんもなくなって、もとどおりのしぜんになってほしいと思います。

東日本大しんさいがなかったら外でもあそべるし、いろいろなことができたと思います。

小さい時をおもいだすとこわかったです。

（20文字 × 20行）

郡山市立高野小学校　7歳

466「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 はしもとこうた

2011年3月11日東日本大しんさいの時、ぼくは四さいで、ようちえんせいでした。

その日、ようちえんから帰ってきて、おやつを食べてテレビを見ていました。じしんがきたときは、こたつの中にかくれました。おさらがおちてわれたり、たなのものがおちてきたりしてとてもこわかったです。

それから4年がたった今、ほとんど前とかわらない生活をしています。たいいくのじゅぎょうも外でできるし、プールにも入れます。でもそれは、たくさんの人たちがじょうぶんをしてくれたからだと思います。

これからのふくしまけんは、たくさん人があつまるようなところになってほしいです。みんながあんしんしてふくしまにこれるといいです。そして、いろいろなんがふくしまにいっぱいきてほしいです。そして、おかあさんが、

「じしんは、ずっとつづくよ。」

と、言いました。すごくこわいと思いました。

（20文字 × 20行）

郡山市立高野小学校　8歳

467　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 いわさきゆあん

2011年3月11日、わたしは、東日本大しんさいの時、ほいくしょでおひるねをしていました。とても大きくゆれたのですが、ぐっすりねていてきづかなかったので先生がおこしてくれました。そして、園ていにみんなでひなんしました。その時、けがをした人はいませんでした。そして、すぐにおばあちゃんがむかえにきてくれました。おかあさんとおとうさんは、しごとでなかなかかえってこなかったのでしんぱいでした。

それからテレビでは毎日家がこわれたりじめんがこわれたり水や電気がとまったりしたところを見ました。でもわたしの家は、かわらやねがおちただけでよかったです。海のほうではつなみがおきて人がなくなりかわいそうでした。

しんさいから4年がたち、ふくしまは元気になってきていると思いますが、もっともっと元気になるよう、わたしは毎日毎日を大切にいきたいです。

（20文字×20行）

郡山市立高野小学校　12歳

468 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 岩崎大暉

ぼくがまだ、2年生の時の出来事でした。あの日はいつも通り、授業が終わって帰りの支度を終えて、学校を出ようとした時でした。床が少しずつ揺れ始め、その揺れは、徐々に強くなって立っていることができなくなりました。ぼくは訓練でもやっていたのでとっさに机の下にもぐりました。揺れは長い時間続きました。机の下でぼくは、不安と恐怖でいっぱいでした。校庭に出ると、とたんに雪がふぶいてきました。ぶるぶる震えていると家の人が迎えに来てくれました。家に着いた時はほっとしました。すぐにテレビをつけると、想像もしていなかった映像が流れていました。地震による津波の映像でした。映像で見ることはありませんでしたが、大勢の人の命を津波が奪っていきました。地震が津波を引き起こすことをその時初めて知りました。この経験を貴重な体験として、これからは防災に備えていきたいです。人々が支え合うことが防災の第一歩だと思いました。

（20文字×20行）

郡山市立高野小学校　12 歳

469 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 [illegible]

ぼくはあの時、帰りの用意をしていました。友達が用意を済ませて外に出ていく中、何人かの友達と教室を出ようとしたその瞬間、地震が起きました。今までも地震は経験していたので、たいしたことではないと思っていると、徐々にその揺れは大きくなっていきました。次の瞬間、揺れはとてつもなく大きくなり恐怖が込み上げてきました。校舎がひび割れ、もうだめかと思いました。その時は気持ちが動転していてよく覚えていませんが、死ぬかもしれないと思ったことは今も強く覚えています。揺れがおさまり、みんなで校庭へ避難しましたが、ぼくの気持ちの混乱はおさまりませんでした。それから学校は1ケ月間休校になりました。ぼくは、神奈川へ避難しました。それでも、福島のことが心配でした。

あれから4年の月日が過ぎました。震災で苦しむ人々は、まだたくさんいます。苦しい思いをする人が一人でも減ってほしいと、心から思っています。

（20文字 × 20行）

郡山市立高野小学校　12歳

470 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 橋本梨々夏

あの日私は、普通通り学校へ行きました。何も変わらない1日の始まりでした。授業が終わり、ちょっと多くの荷物を持ちながら昇降口に向かったその時、足元が揺れ始めました。校舎ががたがたと大きな音を立てて揺れ始めました。怖くなってすぐに校庭に逃げました。校庭に出ても揺れはおさまらず、立っていることができませんでした。何が起こっているのかその時は、あまりの恐怖に理解できませんでした。ふと校舎に目を向けると、大きな校舎が左右に揺れていました。校舎の中には友達がたくさんいたのでとても心配になりました。心の中で声にならない声で「みんな早く逃げて。」と何度もさけんでいました。その願いは通じ、誰一人命を落としたりけがをしたりすることはありませんでした。

あれからもうすぐ4年が経とうとしています。現在は、放射線による風評被害の問題を抱えています。しかし将来に向かってみんなで力強く生きることが必要だと感じています。

（20文字 × 20行）

郡山市立高野小学校　11歳

471　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 武田祥希

もうすぐ3月11日がやってきます。あれから4年の月日が経ちました。ぼくはずっとあの日のことを忘れたいと思っています。でも、今は、忘れてはいけないと思うこともふえてきました。

あの日はとても寒い1日でした。下校時刻が近づいたころ、校庭の掲揚塔が風で揺れてカタカタと音を立てていました。「今日は風が強いな。」と思った次の瞬間、あの地震がおきました。がたがたと音を立てて揺れはじめました。無我夢中で校庭に飛び出しました。頭の中は真っ白で、とにかく上へ上へというあせりだけが、ぼくを動かしていました。安全な場所にたどりつき、バキバキと胸の鼓動はおさまりませんでした。

あの日のことは、やっぱり記憶から消えることはありません。今は、風評被害のことがとても気になります。まだ、避難生活をしている人も多くいます。早く風評被害が無くなり、復興してほしいと心から願っています。

（20文字 × 20行）

伊東 流生　二本松市立旭小学校　8歳

地しんがおきて思ったこと

旭小学校二年　伊東　流生

ぼくが四才の時、ほいく園であそんでいたら、きゅうにグラグラッとへやがゆれ出しました。

あっ、地しんだ。

みんなでつくえの下にかくれました。とても長い時間ゆれたと思いました。その後、みんなで外ににげました。すごくこわかったです。

つぎの日、町へ出かけると中にまわりを見たら、土手がくずれているところがたくさんありました。地しんがこんなにすごい力をもっているとは思いませんでした。地しんは本当にこわいと思いました。ほいく園もこわれたので、新どのじゅうみんセンターに通うことになりました。

今でも、たまに地しんがおきると、ドキドキします。地しんは毎日のあたり前の生活をこわしてしまうので、もう大きな地しんがないといいなと思いました。

B4（20×20）こだま原稿用紙は再生紙を使用しております。

会津美里町立新鶴中学校　15 歳

473 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 遠藤和明

あの日から四年の歳月が経とうとしています。私は、この震災でさまざまな経験をしました。普段何気なく使っていた水道が止まり、トイレの使用の際にはバケツを使いプールの水で流していました。食料は不足し、一日二食の生活――。何か食べたくてもスーパーでは何一つ売っていません。一週間後、私は会津美里町に避難しました。その時初めて、当たり前のことが当たり前にできることの有り難みを感じました。

現在私は会津美里町で避難生活を送っています。今年は受験生なので、試験に向けた面接練習や作文練習に日々励んでいます。私は今年新設される「ふたば未来学園」を志願しており、将来は少しでも福島が元気になる仕事に就きたいと考えています。

今後何としても原発問題を解決させ、除染作業の推を図って、全ての関係町村が一日も早い帰還、復興を果たせることを心から願っています。

（20文字 × 20行）

大震災の体験談と復興への想い

五年　根本　一希

三月十一日に震度六の大きな地震が起きました。

その時、ぼくが三年生で帰りのあいさつをしている時でした。突然大きなゆれが来て先生の指示が教室に響きわたりました。泣きだす子がいました。

ぼくは、一番に迎えにきてくれました。幸い一人も残らずみんな家に帰れました。家に帰ってからニュースで地震だけではなく津波もあってたくさん人の命があっという間にのみこまれた事にびっくりしました。人の命の大切さ、今生きている事をこれからも忘れずに生きていきたいと思います。

475　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 星野健太

ぼくが、今でも心に残っている体験は、東日本大震災です。東日本大震災はぼくが小学三年生の頃におこりました。あの時はもう六時間目が終わり帰りの会をやっていました。突然地震が起こったので皆んなびっくりしていて、地震が怖くて泣いてしまう人も多くいました。ぼくのお母さんは海の近くで仕事をしているので地震で津波が起きたと学校の先生が言っていたのでとても心配しましたが、無事だったので、良かったです。ぼくは学校から出た後、家に一度帰り、必要な食料などをすべて持ち、それからお父さんとお兄ちゃんを迎えにいきました。その時は、食べる物が全然なく、近くのコンビニなどに行っても食べる物が全然売ってたなかったので、ほとんど食べれない日が多かったです。ぼくは嫌いな食べ物があったりするといつも食べていなかったけれど、その日、初めて食の大切さを知りました。だからぼくは、たとえ嫌いな物があったとしても食べるようにしたいです。

（20文字 × 20行）

476 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 井戸川明詩

私は震災当時、小学三年生でした。六年生のために卒業式の式場作成で三年生から五年生までの生徒は体育館に集まっていました。全員集合し、先生が式場作成について説明していた時でした。「ゴゴゴゴ」と言うような音にパニックになっていると体育館が大きくゆれはじめました。先生の指示で校庭に出るとついさっきまで居た体育館のガラスがミシミシいっていました。

家に帰るとかべらがいくつも落ちていました。まだ余震があったため家の中には入いれませんでした。その日の夜は皆で茶の間に集まってねました。余震が多くねむれなかったのを今でも忘れません。

これからの復興は原発を何とかすること、除染・がれき撤去を優先し、一日でも早く、故郷の小高に帰れるようにしてもらえることを願います。

（20文字 × 20行）

南相馬市立小高中学校　13 歳

477「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 金谷彩夏

体験は東日本大震災でうしろから黒いつなみを見てつなみがこわいんだと知りました。

私も小高の時に近くの家に親友がいてその子がつなみでしくなったって聞いてすごく悲しくなった。それでつなみがこわいし海の絵とか見たら涙が出てしまうのです。

復興の想いは早く小高に帰りたいし、小高の家はこわれているんですけど立て直して住みたいのが夢っていうかです。

2つ目は原発とかをゆいじょしてほしいことです。これからはまだじしんはあると思うんですけど健康とかには気をつけたいです。

あと、前を向いてまっすぐな人生を歩みたいです。これからもめあてをもって自身をもって命は一つしかないと校長先生からきいたので今年も安全に過ごしたいと思う。

部活でもしんけんに取りくんでいきたいしもっとほうふを持っていきたいです。

今までも事故にあってしょうとつ事故もあったんですけど今年は元気になりたいです。

（20文字 × 20行）

478　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 松本 拓海

二〇一一年三月十一日東日本大震災で、僕の生活の環境が一変しました。

大くの犠牲者を出し今も行方不明者がたくさんいる中、僕の家族は全員無事でした。その後の原発事故で四カ所の避難所生活をしました。朝から就寝までは切りのない学校になった教室の中で寒い夜が一カ月近くも続きました。老人の人は体が弱ってきたり、大部分がおにぎりやパン、水や缶詰めなどで野菜や魚がなく栄養のバランスとれませんでした。

周りの人は「いつ帰れるんだろう、このままどうなるんだろう」と不安の声が聞こえてきました。僕は同じ避難している教室で、仲良くなった友達が出来たので、それまではあまり淋しいとか思いませんでしたが、その時少し不安を感じました。

今、仮設住宅の生活まで落ちつきましたが今後、小高区がどのように変わっていくのかとても不安です。少しずつでも震災前の小高区に戻れるよう出来る事は協力したいです。

（20文字 × 20行）

479 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 稲垣 樹

2011年3月11日。その日に私は、数えきれないほどの喜こびや楽しみをうばわれ、悲しみ怒りという言葉が頭の中を過りました。

その中で1つだけ悔しいという言葉だけが残りました。1年、2年と避難生活を送っていてもなぜ悔しいという言葉だけが残るのかがわかりませんでした。

2014年。震災から3年。今年は4年に一度のFIFAワールドカップが開催された。私はそれまで、2年生から始め3年生で辞めることになってしまったサッカー。その言葉を避けるように生活してきた。なぜなら悔しいからだ。2011年のFIFA女子ワールドカップも見ていない。女子、サッカーという言葉を聞くだけで悔しくてしかたがなかった。

私は、今年のワールドカップで日本代表のプレー、ブラジルのプレーを見て強くバを動かされた。今からでも遅くない。私は、サッカーでお世話になった人たちを笑顔にしたい。

（20文字 × 20行）

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

南相馬市立小高中学校　13 歳
氏名 佐藤 俊哉

2011年3月11日の午後2時46分に、東日本大震災がおきました。僕は当時小学3年生で帰りの学活の最中でした。

その時、突然地震がおきました。最初は小さな揺れが、少しずつ大きく激しくなっていきました。僕達は先生の指示で急いで机の下にかくれ、地震が収まるのを待ちました。僕がかくれていた机の近くには窓ガラスがあり、ガラスが割れた時の破片がとんでこないか不安になりました。揺れが収まり、校庭へクラスのみんなと避難し、家族がむかえに来るのを待ちました。家族がむかえに来てくれて、僕は家へ帰りました。家へ着いた時、僕は家の屋根瓦が大量に地面におちている事や窓ガラスが割れている事に気がつきました。さいわい、生まれたばかりの子犬や飼っていた犬2匹とも怪ガが無く無事で安心しました。今、僕達は故郷の小高を離れ鹿島区の仮設住宅でくらしています。早く小高に帰れるように、僕にできる事をやっていこうと思います。

（20文字 × 20行）

481

南相馬市立小高中学校　13歳

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 林崎一真

東日本大震災を体験して思ったことは、多くの人々が、きもちをこめておくってくれたメッセージなどのしえんがとてもうれしかったです。しかし震災でなくなった人のことを思うととてもかなしくなります。

私のすんでいた小高の家はつなみのひがいはうけませんでしたが、中の食器だなやつくえいす、など多くのものがたおれていてみたときはとてもビックリしました。

小学四年生のはじめは、あいづにひなんして、生活していました。なれない土地や生活、学校でいつもくろうしていました。

だけれども、多くの友達ができてとてもうれしかった。しかし、夏のころ南相馬の学校にもどるということでもどってきました。

私は、南相馬にもどってこれてうれしかったけど、あいづの小学校で友達とわかれるのはとてもかなしかったです。

このことから一日でもはやい復こうをめざしています。

（20文字 × 20行）

南相馬市立小高中学校　13 歳

482 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 行徳 麻理愛

2011年3月11日，東日本大震災がありました。

当時，私は9歳で3年生でした。私達，3年生は3クラスあり，私は1組でした。3年1組では帰りの会を行っていました。

その時でした。地なりがして教室が揺れ始めました。ドアや壁が壊れそうなくらい揺れていました。泣いている子もいました。

何分かした後，生徒は親が向かえに来て帰っていました。が，私は向かえが来ませんでした。教室でついているラジオやテレビで津波が来ていると知りました。私の家は海から十数メートルしかなかったので，もうダメだと心の中で思いました。

小高小学校は向かえの来ない生徒達で高台の小高工業の体育館へ避難しました。

数日後，東京電力の原子力発電所の事故が起きました。私達，家族はそれから避難を繰り返し色々な所へ行きました。今は鹿島の住宅で暮らしています。復興を願っています。

（20文字 × 20行）

南相馬市立小高中学校　13 歳

483　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名　渡部怜桃

私たちは、4年前の、「東日本大震災」により、けして便利、自由とはいえない生活をしています。

しかし、この「東日本大震災」があったから、ということでいろいろな人と繋がることができました。南相馬市では、子どものつばさというプロジェクトで、日本全国へ合宿に行くことができたり、学校にジャニーズ事務所の方から遊具を贈っていただけたりし、全国各地の方々と繋がることができました。

私も小学校の時参加した子どものつばさによって、福岡、北海道、新潟、茨城に行かせてもらいました。どの地域でも温かくむかえていただいた事、忘れていません。

私たちは、今、復興に向けて、精いっぱい自分が一人一人できることに取り組んでいます。

今までしてもらっていた支援へのお礼を、今度は私たちがなにかできたらな、と思っています。

（20文字 × 20行）

484 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 牧野 智史

私は小学四年生のときに南相馬市小高区で東日本大震災により被災した。故郷の街並みは一変した。商店街の建物の多くが倒壊し、沿岸部は津波で多くの犠牲者を出し、福島第一原発の事故により避難区域となった。

事故の1年後、私は初めて故郷に戻った。震災当時のままだった。いや、まだ震災は続いていると思った。

それからさらに3年かたった。震災から4年、倒壊した建物やがれきの撤去、主要な建物の除染はほとんど終わった。でも、ただそれだけだ。市は旧避難区域での事業所の再開を認めている。しかし、ほとんどの事業所は戻っていないし、避難指示解除後よりも車の往来も減っている。

復興とは、災害が起こる前と同じくらいに盛んになるということを意味する。今のままではたして復興できるのだろうか。小高の課題は、区民が一丸となって思いを一つにして復興に向け、尽力することではないだろうか。

（20文字 × 20行）

南相馬市立小高中学校　14 歳

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 越田 みのり

当たり前だと思っていた日常が、震災後は大きく変わってしまいました。しかし悪い事ばかりではありませんでした。物が足りずお店にもなかった震災直後には日本全国、世界からの支援物資が届き、人と人とのつながりや優しさを改めて感じました。小高に帰れず仮設住宅暮らしではありますが、狭いからこそ家族の絆を感じられる生活ができるという良い点もあります。震災後は離れ離れになった時期があり心細く感じていましたが、久しぶりにそろった時はとても嬉しく、ほっとしました。学校も仮設校舎で人数も$\frac{1}{3}$に減ってしまいました。不便なことが多い学校生活のなかで楽しく仲良く過ごし、勉強も部活動もそれぞれの目標に向かって頑張っています。

復興はまだまだ先のことになりそうですが夢に向かって前に進んでいくことが支援してくださった方々への恩返しにつながると思うので、精一杯頑張っていきたいと思います。

（20文字 × 20行）

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

南相馬市立小高中学校　14歳
氏名 [illegible]

東日本大震災が起こった時私は小学四年生でした。帰りの会が始まろうとした時、大きなゆれが私たちを襲いました。こんな大きな地震は、初めてだったのでとても怖かったです。

私は、友達と話している時に地震になり友達三人と私の机の下にもぐりました。その日は、職場体験の中学生が来ていました。泣いている子やばたばたしている子、パニックっている子が多くいました。私は、怖くて泣いていました。地震がおさまったもので外に出ました。電柱がたおれていたり、木が折れていたりしました。私は、唖然としていました。親がむかえに来てくれて、帰って家についても地震は、止まりませんでした。家についても地震は、止まりませんでした。本当に怖かったです。そして、次の日原発は爆発しました。原町に非難してもだめだったのが原発に行きました。会津から郡山を主として相馬に住む鹿島に住む、今原町に住んでいます。今は、仮設校舎で勉強をしています。とても不便です。いつ本校舎で勉強ができるのでしょうか。その日を楽しみにして毎日も頑張っていきたいです。

(20×字×20行)

南相馬市立小高中学校　14 歳

487　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 [illegible]

私は東日本大震災を経験したから、地震が少しなるたび少し不安な気持ちになります。私たちは地震だけのひがいではなく、津波、原発の3つのひがいを受けました。今こうして明るく生活しているけれど、東日本大震災がなければ、学校で友達と一緒に笑顔で生活出来ていたんだなと考えるとちょっともやもやして、つらい気持ちになります。

私たちは今現在仮設校舎で生活しています。少ない人数の中1人1人が協力し合い努力して頑張っています。

私は、東日本大震災があってから、人への思いやりやありがたさがわかるようになりました。私たちがくらす上で必要な物など、ごはんが、ごくごく不さったりたくさんの人の心の温かさが伝わってきました。

私はこれからも周りの人へのありがたさなどをわすれないようにして生活したいと思います。

（20文字 × 20行）

南相馬市立小高中学校　14歳

488　「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名　横山あゆみ

あの東日本大震災から　年が過ぎた今は、瓦礫が撤去されて、遠くまで避難した人は少しずつ地元に戻ってきて、辞めてしまった店もありますが再開した店もあります。でもが現状なんてほとんど変化など得られていないと私は思います。県外ではもう被災地の報道なんてしていないでしょう。もしかしたら、忘れている人もいるかも知れない。復興だなんていって支援をしてくれた方々は今はどう思っているだろうか？と思うときがあります。

今でもずっと支援を送ってきてくださる方もいます。それは本当にありがたく思っています。私は今、震災前の家に帰らず新しい家を建てました。生活も今までせまかった部屋からぐっと一人部屋になり少し楽になりました。今想うと体育館で過ごした日は貴重な時間だったなと思います。悲しかったことは何度もありましたが、嬉しかったことも幸せなことも何度もありました。これからどんな未来であっても私はプラスに考えることにします。

（20文字 × 20行）

489 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 佐藤 友南

あの日、3日11日2時46分。私は母校の金房小学校、4年教室にクラスメート、そして担任の先生と居ました。その中の1人がある事を言いました。「なんか揺れてない？」その時、大きな横揺れが私達を襲いました。怖かった、恐怖だった、死ぬ、と思った。外に出ても、寒さと恐怖で震えていました。数分後、学校のみんなと別れて家に帰りました。それが、クラス全員と一緒に居た最後でした。家に帰ると、一瞬、目を疑った。今見てるこの映像が本当なのか？信じたくもなかった。津波に流される人、物、私の故郷が消えていった。そして次の日に起きた原発爆発。私から、全てを奪っていったあの日。友達、大切にしていた物、故郷、小高、全部無となった

あの日。あんな日はもうあってはならないと思います。私は復興ではなく、これからの未来に力を注ぎたい。津波による犠牲者を少しでも減らしたい。原発を少なくしたい。子供が安心して暮らせるような社会にしたい。

（20文字 × 20行）

相馬市立磯部中学校　13 歳

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 稲山 樹

僕は、東日本大震災がきたときに、小学校の教室で勉強をしていました。地しんがおきた時は教室の机のしたにかくれていました。教室の机はぐらぐらとしておさえていてもゆれていました。そして、地しんがおわってから、つなみがきました。つなみでひなんすることはできないしどうしようと思いました。そして、学校で一夜をあけてみるとつなみで家やコンクリートんがなくなっていました。なのでこれからは大きなじしんがおきたらみずからひなんしていきたいなと思いました。

僕は学校でたき出しの訓練をしました。たき出しの訓練は、さい害がおきた等のためにやりました。たき出し訓練ではマッチでまきに火をつけて、火をたきました。火をつけてからはもんじゃ焼きを作りました。しんさいがおきたら訓練のようにしてたき出しができるようにしたいです。

（20文字 × 20行）

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

相馬市立磯部中学校　13 歳
氏名 岩崎海里

僕が体験した東日本大震災は、千年に一度と言われた自然災害です。

僕はその時3年生でした。音楽室でスネアドゥムの練習をしていました。震災は、その時に発生しました。ゴーと大きな音をたてて大きくゆれました。仲間や家族が恐怖にさらされました。翌日、食べ物がなく空腹状態がつづきました。やっと避難ができるようになった道を車でゆっくりと進みました。状況はしんさくでした。

いとこの家に一時避難をしました。ボロボロになった家を次の日がたづけにいきました。この時いとこのお父さんやおばあちゃん、おじいちゃんが手伝ってくれました。この時僕はあらためて感謝の気持ちを感じました。復興というものは、協力ただ一つだと僕は、おもいました。みんなで協力して復興していくことを僕は、思っています。

（20文字 × 20行）

相馬市立磯部中学校　12 歳

492

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 狩野優太

僕は、東日本大震災の時に小学校にいました。

それは学校で勉強していた時でした。そして外にひなんしました。そのうちむかえがきて家へ帰りました。そして家に帰ってテレビをつけると大津波警報がだされていました。そのころの僕は大津波警報って言ってもきたって3メートルぐらいだなと思っていました。でも実際にきたのは20メートルもありました。そして津波がくるのを家から見ました。とても恐ろしかったです。

でも、僕らは大変なことがあっても前に進まなければなりません。そしてもとの美しい相馬に戻していきたいです。

（20文字 × 20行）

相馬市立磯部中学校　12 歳

493 「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 宍戸洸仁

ぼくが小学3年生の時に東日本大震災が起こりました。

その時ぼくは、3年生教室で勉強をしていました。その時、教室がグラグラとゆれはじめました。最初は風か何かかと思いましたが、しだいに大きくなってきて、先生に「机の下にもぐれ！」と言われて、机の下にもぐりました。でしたが机の下にもぐっても、机ごとガタガタと動いてしまうほど大きいゆれで、先生の指じにしたがって外に出ました。外に出た時にもグラグラしてて、しょうじきこわかったです。

この震災で友人を一人亡くしました。

しかし、この悲しみにも負けず、一日でも早く、少しずつでも復興へと一歩一歩あゆんでもらいたいです。

現在、磯部は少しずつがれきもかたづいてきていますが、まだまだ人手も足りず、時間も足りません。だから、みんな一人一人の協力が大切なのです。

（20文字 × 20行）

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

相馬市立磯部中学校　13 歳
氏名 立谷 純太郎

僕が体験した、東日本大震災がきた時はまだ自分は小学生でした。その時は下校時間で友達を待っている時に、「ゴゴゴ…」とゆれがはじまったのです。あの時はじしんはあまり体験したことなかったので かるいじしんと思う前に、とても大きなゆれがおそいかかりました。

その後 ゆれがおさまり安心したと思ったら、つなみがきました。僕はその時家に帰り二階からみると、黒い波がおしよせてました。僕ら家族は姉と父がいない不安のままで避難所にいき、家族かられんらくがきたときはホッとしました。

東日本大震災では、たくさんこわいことばかりでしたが、いざとなったらすごい力ができると実感しました。

これからも、復興にむけて大人だけではなく、今の子供がこれから活躍するので、しっかり復興にむけてがんばりたいと思います。

（20文字 × 20行）

相馬市立磯部中学校　13 歳

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 福島陽斗

僕は、東日本大震災の時に小学校3年生でした。

音楽室で地震が起きてピアノの下ににげました。周りの物がちらかってにげていたピアノも動いていたので、ひっしにおさえていました。外に出てみるとみんなが避難していました。でもあの日は寒くて雪まで降ってたえていました。その後に僕は、家に戻ってテレビを見てみたら、岩手県に津波が来てました。その時にテレビが消えて外を見たら津波が電柱や周りの物をのみこんできよって、あの時は、もう恐ろしかったです。

今は、どんどんと元の形に戻るように復興が進んでいます。一日も早く元の形に戻れば良いと思います。

（20文字 × 20行）

相馬市立磯部中学校　13 歳

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

氏名 大和田 浩

私は、東日本大震災の時小学3年生でした。音楽室にいる同級生を呼びにいった時地しんにあい、ピアノの下に隠れました。それから家の人といっしょに、近くの山ににげました。山からは津波が次々と木をたおすのが見えました。私はその景色を見てとても悲しくなりました。津波がおさまってから学校に地域の人とひなんすることになり歩いていくと、がれきが山のようにあり、電線が切れていたのでとても危険な状態でした。次の日は、車が通れるようにがれきをどかしてくれたのでバスで別の被なん場所へ行くことになりました。

私はこの東日本大震災を体験して、多くのぎせい者を出してしまったことがとても残念でした。なので、大丈夫と思う気持ちより危険だからにげようという気持ちを持って生活していってほしいと思います。

（20文字 × 20行）

相馬市立磯部中学校　13 歳

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 門馬 麻里菜

私は、小学校の三年生の教室で勉強をしていた時に東日本大震災がおきました。ゆれていて、外に、にげ毛布をかけていたりしました。カミナリみたいな音がしてあとでこの音はつなみの音だとわかりました。マットをもってきたりしてすわっていたら、雪がふってきたので通路にマットや、毛布を運んで、通路にみんないた。教室を地区ごとにわけて、その地区の所にねました。私の所は人が多かったので、しょうこう口にいて車の中でねました。次の日バスが来てバスにのってはまなす館に行きました。はまなす館にねとまりをしていました。私は親せきの家にいました。

磯部が1日でも早く復興してほしいと思います。復興でいい磯部に出来るように私たちも頑張りたいと思います。

（20文字 × 20行）

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

相馬市立磯部中学校　14 歳
氏名 阿部 [illegible]

僕が体験した話は2011年3月11日に100の年に1度の大地震がきました。その時コンピューター室で鼓笛の練習をしている時に発生しました。地震がきた時はすぐに隠れて、ゆれがおさまった時に先生の指示を聞いて逃げました。その時寒かったので、先生が2階から皆のコートを渡しました。夕方になって親と合流をして車の中にいました。その日は余震が何回もさて怖くて寝れなくてずっと起きてました。寝られるようになったのは山形県に避難した時です。山形は余震も来なくて安心しながら寝られました。

今後は完全復興を出来るように自分が出来る事を色々していきたいです。

(20文字 × 20行)

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿

相馬市立磯部中学校　14 歳
氏名 金澤 茂樹

僕は震災の時、校庭で遊んでいました。そして14時46分に地震がおき、次第に弱まった時に体育館へ避難しました。しばらく余震が続き、結局家へ帰ったのは17時ぐらいでした。そこでニュースを見て初めて津波のことを知りました。いろんな不安の中、たてつづけにおきた原発事故などがさらに不安を大きくさせました。

今、改めて振り返ってみて僕は、支援物資を送ってくれた人達に感謝しています。物資がなかなか手に入らない状況で支援物資が手に入ることとても助かりました。

このような震災で体験したことから、僕は災害がおきたら、みんなで助けあっていくことが大切だと思います。

（20文字 × 20行）

相馬市立磯部中学校　14 歳

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募原稿　氏名 佐々木健太

2011年3月11日2時46分僕達は、とても大きな地震と津波を目の当たりにしました。今もあの光景は忘れません。死者も出ました。その時僕は鼓笛でやるトランペットの練習をしていたので助かりました。その後も余震が多く発生し、生活が落ち着くまでは、かなりの時間がかかりました。

そして、あれから4年が経過した今、復興に向けていろいろなことが行われてきました。道路の除染や漁港の修理・地割れした道路の修理などの他にもたくさんあります。けれど、まだまだ直すものはたくさんあります。その中でも傷ついた人の心はなかなか直せません。大切なものを失ったり人を失ったりしたので、直すにはかなりの時間が必要です。

これからも復興は続きます。将来は完全復興は難しいと思いますが、それに近い復興をして前のような良い生活が送れる毎日になればいいと思っているので、僕も何かの力になるよう頑張って今を過ごしていきたいです。

（20文字 × 20行）